

スペインで見聞した諺と迷信

「人のふり見てわがふり直せ」——先月のヘッドラインで畠山さんが日本の諺を取り上げていました。諺といえば、世界でも、いかにもその国らしいものがあります。そこで以前、私が定年留学中に見聞したスペインの諺と、この機会に迷信についても紹介してみましよう。

もともとスペインは諺の豊かな国です。スペイン語圏の人々は、その歴史的遺産でもある諺をこよなく愛しており、諺は教養の一つである、とさえ思われます。あらゆる機会に、あらゆる場所で使われる。小説「ドン・キホーテ」に登場するサンチョ・パンサがしゃべる言葉の中には、庶民の実感に根ざした諺、あるいはそれに類した創造語が頻繁に出てきます。

6月のある日、マラガ大学での会話クラスの研究発表でのことでした。担当となった留学生リストは、テーマにスペインの諺を取り上げました。彼は北欧のエストニア出身。30代そこそこで体格のがっしりした男性。頭は丸刈りで往年の名優ユル・ブリンナーに似ています。“実演”も交えた発表が大変に面白かったので、その一部を再現してみましよう。

——黒板の前にある教師用の机に座ると、彼はまず後ろに置いてあった鞆の中からおもむろに小さな辞典のような本を机に取り出しました。

「諺の辞典です」

続いて再び後ろにかがむようにすると、中くらいの大きさの本を取り出しました。

「諺の辞典です。1万1千の諺が載っています」

「小」から「大」へ。そのしぐさに教室は大笑い。彼がもう一度かがむと、今度は日本の百科事典を倍の厚さにしたような本を取り出しました。

「これも諺の辞典です。6万の諺が載っています」

教室は爆笑と拍手。それほど多くの諺の本もある、ということなのでしょう。かくして彼は、50余りの諺を状況に合わせて順序だてて読み上げ、説明を加えていきました。諺には、語頭または語尾が韻を踏む面白さのものがありますが、残念ながら日本語訳ではその面白さは再現できません。代表例の私の訳は、なるべく日本の諺のようにやってみました。

「安物は却って高価につく」——日本の「安物買いの銭失い」と同じ意味でしょう。

「腐ったりんごは隣まで腐らせる」——「朱に交われば赤くなる」といったところでしょうか。

「最後の旅にトランクは要らない」——意味深長な諺になりますが、たしかに死んだ後のあの世の旅にはトランクは必要ありませんね。

「うんと食べるものはうんと糞ひる」——少々下品な諺ですが、人間のあるいは動物の自

然の摂理を言い当てています。

.....

今度は、また後ろの鞆から何かを取り出しました。なんと、それは 1 本のワインとグラス。ボトルを開け、グラスに注ぎ、一口飲むとおもむろに次の諺を読み上げました。教室内のみんなは野次馬根性でその展開を見えています。担当教師のローラも、笑いながら黙認しています。

「やぶ蚊が蛙に言った。『水の中で生きているよりも、ワインの中で死んだほうがいい』」

「水は魚に、ワインは人間に」

「ワインなしの人生に喜びなし」

「ワインについて語る者は喉が渇く」

こう言いながら、またグラスを一杯。

「ワインは、飲めば飲むほど、喉はますます渇く」

こう言いながら、さらにもう一杯。スペインはワインの国です。栽培面積は世界一、生産量ではフランス、イタリアに次いで世界第 3 位。それほどに、ワインについての諺も多いのです。

この辺から、また真面目な諺に戻ってきました。これにはスペイン語の原文もつけ、私の拙訳と同類の日本の諺とも対比してみましよう。

(スペイン語は基本的にローマ字読みでも通じます)

No vendas la piel del oso antes de cazarlo. (ノ ベンダス ラ ピエル デル オソ アンテス デ カサルロ)

「熊を獲りおさえる前に熊の皮を売りに出すな」——「獲らぬ狸の皮算用」ですね。

En boca cerrada, no entran moscas. (エン ラ ボカ セラーダ、ノ エントラン モスカス)

「閉じた口には蚊は飛び込まない」——「口は禍のもと」

Nunca llueve a gusto de todos. (ヌンカ ジュエベ ア グスト デ トードス)

「雨は決してみんなに都合の良いようには降ってくれない」——「あちらを立てればこちらが立たず」といったところでしょう。

かくして、研究発表の締めくくりとして彼は言いました。「昔からの諺は決してうそをつかない」「諺の中に真実あり」——。

諺は社会の中での人間の生き方、心の機微をついています。この項の締めくくりとして、私も二つの諺を紹介させてください。

Nunca es tarde para aprender. (ヌンカ エス タルデ パラ アプレNDER)

「学ぶのに決して遅いということはない」

Se puede aprender a cualquier edad. (セ プエデ アプレNDER ア クアルケル エダー)

「人生、何歳からでも勉強できる」

——「六十の手習い」です。少し真面目すぎますかね？

翌週の金曜日。朝起きると珍しく雷鳴がとどろいていました。黒く曇った空からはポツリポツリと雨が降り始めました。すぐに止みそうな気配でしたが、念のために日本から持っていった黄色い折り畳み用の傘を持参しました。

校舎に着くと一番乗りで教室にはまだ誰もいません。始業までまだ10分ほどあったので私は自分の机の前に濡れた傘を広げておきました。5分ほどして、幼稚園の先生をしているというスイス人のサラが教室に入ってきました。そして私の前の広がった傘を見るなり、彼女は挨拶もそこそこに叫び声をあげたのです。

“Que mala suerte!” (ケ マラ スエルテ!) 「なんて運の悪くなることをするんでしょう！」

「え！ 何が？」

「あなた知らなかったの？ 部屋の中に傘を広げておくことは、不幸をもたらす良くないこととされているのよ」

「へえ！ それは知らなかったなあ。じゃあ、どこに広げたらいいんだい？」

「そりゃ、もちろん家の外よ」

やりとりをしている間に、文法の担当教師ラウラが教室に入ってきました。文法もだけれど、スペイン文化、スペインの風習を知ることも大事なことです。そこで、他の同僚も揃ってきたところで、改めてラウラに聞いてみました。

「そう、サラの言うとおりのよ。あなたのやったことを見たら大部分のスペイン人は驚き、一部の人には嫌がるワ。「スペルティション」、迷信と言うんだけど、こういうの他にもいくつかあるのよネ」

そういいながら彼女はいくつかの例をあげたのです。

- ✧ 黒い猫が自分の前を通ること
 - ✧ はさみが広げられたまま置かれていること
 - ✧ 鏡を落として割ってしまったとき
- 等々

日本にも多くの迷信があります。その非科学性、非合理性がすべて迷信とだとしてあっさり片付けてしまえば、人間の精神の豊かさというものが無くなってしまふかもしれません。庶民の心理には世界に共通するものがあるようです。